

特別活動部会

研究主題 「生徒による授業評価を生かしたホームルーム活動の指導の改善」

I 研究の目的

平成16年度から、生徒による授業評価が全校で実施されることとなったが、ホームルーム活動における生徒による授業評価については、これまで授業評価の観点例の研究開発は行われていない。

そこで、本年度は標記の研究主題を設定し、いわゆる「ロングホームルーム」における授業評価の観点例について研究開発することとした。

「『いい授業しようよ』生徒による授業評価開発委員会報告書」（平成16年1月 東京都教育委員会）によれば、「生徒による授業評価とは、教員が自らの授業を客観的に評価するための方法の一つであり、指導力の向上や授業の改善を図ることを目的として行うものである」とある。

これは、「ロングホームルーム」における指導についても当てはまるものである。私たち教員は生徒からの評価に一喜一憂するのではなく、生徒の声を参考にしてよりよい「ロングホームルーム」の時間を創造していくことが、責務であると考えた。

II 研究の内容

1 ホームルーム活動の指導に対する生徒による授業評価の考え方

ホームルーム活動は、具体的な活動のねらいに沿って展開される生徒の自主的、実践的な活動である。各教科の授業が教員主体となりがちなのに対して、「ロングホームルーム」では生徒自身の学校生活上の諸問題を題材とし、生徒が主体で運営などをすることにより自主性や実践力などをはぐくむことが可能となる。

また、学校行事などの準備や参加を通して、人間的な成長が期待でき、社会性や協調性などを育成することができる。

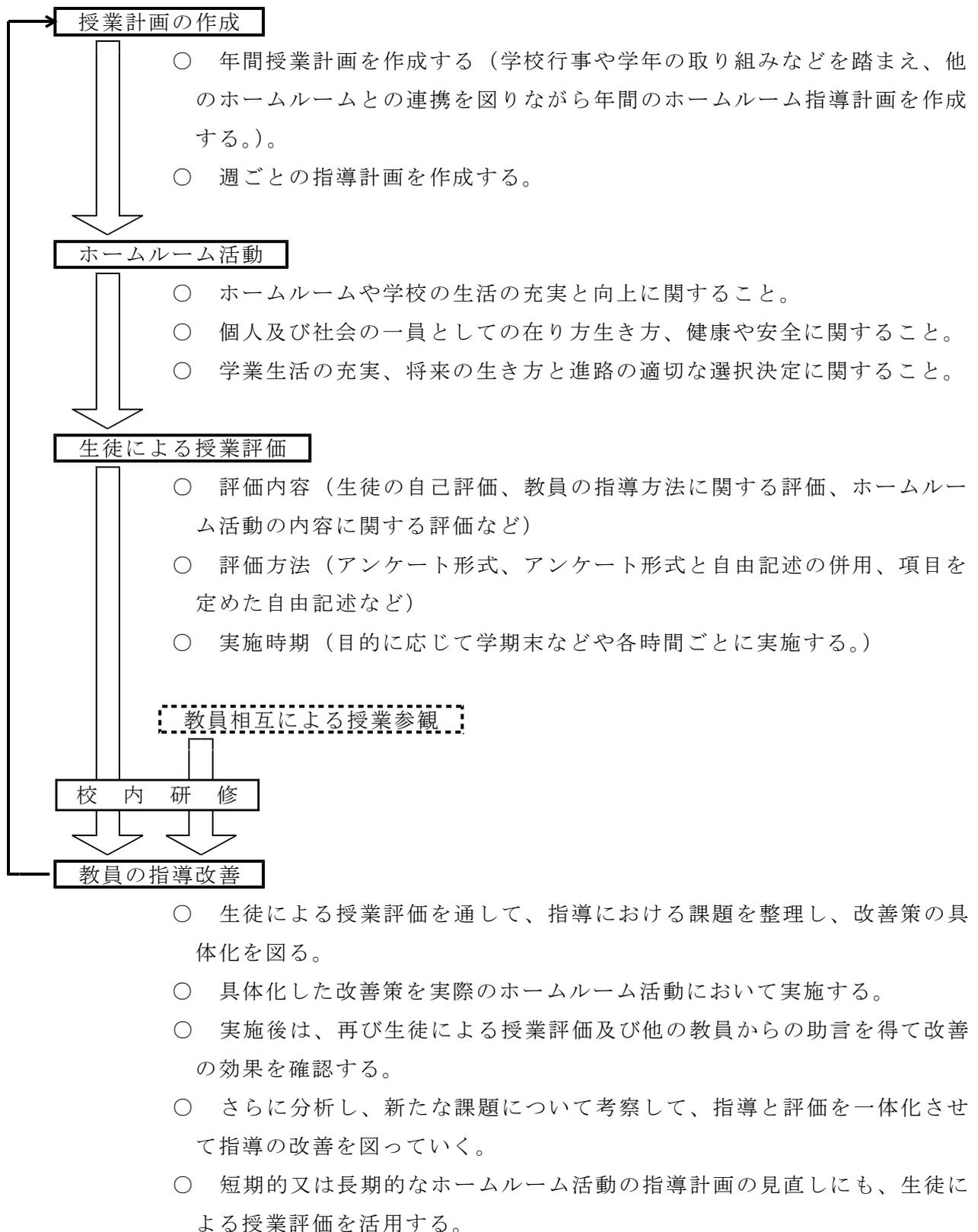
しかし、生徒が主体であるとはいえ、生徒の自主性に任せて教員は何もしなくてよいということではなく、教員の適切な指導・援助が不可欠であることは言うまでもない。また、「ロングホームルーム」は取り上げる題材の違いによって指導内容や指導方法、指導を行う場所などが変化する教育活動である。したがって、教員の指導や生徒の活動の目的・目標を明確化し、年間授業計画や週ごとの指導計画などを綿密に立てて実施しなければならない。

上記の点を踏まえ、本部会は学習指導要領に示される特別活動の内容（ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事）のうち、ホームルーム活動の、いわゆる「ロングホームルーム」の改善にも生徒による授業評価が有効であると考えた。

※以下、本文中の「ホームルーム活動」とは、「ロングホームルーム」を示す。

2 生徒による授業評価の具体的な進め方

(1) 生徒による授業評価を生かした指導の流れ



(2) ホームルーム活動における観点別質問項目一覧

観 点	質 問 項 目
安全確認	生徒の安全に注意してホームルーム活動を実施していますか
生徒把握	先生はホームルーム活動中の生徒の行動を十分把握していますか
目的や内容の明確化	課題や材料などについての説明が十分にされていますか
目的や内容の明確化	ホームルーム活動の進め方について詳しく説明していますか
目的や内容の明確化	説明の際、分かりやすい例を挙げていますか
説明の仕方	説明は丁寧に行われていますか
説明の仕方	説明は理解しやすいですか
説明の仕方	声の大きさやスピードは適切で聞き取りやすいですか
説明の仕方	分かりやすい言葉で説明していますか
授業の工夫	常に新しい知識や技術を指導していますか
授業の工夫	先生は全生徒が参加できるように努力をしていますか
授業の工夫	生徒が興味を感じるように工夫をしてホームルーム活動を行っていますか
授業の工夫	先生は充実した活動ができるように工夫していますか
姿勢	生徒に対して公平ですか
姿勢	先生は毎回のホームルーム活動を大切にしていますか
姿勢	先生は自信をもってホームルーム活動に取り組んでいますか
姿勢	先生は全員に質問したり、声をかけたりするようにしていますか
熱意	生徒が興味や関心を抱くようなホームルーム活動にしようと努力していますか
熱意	先生はホームルーム活動に対して熱意や意欲をもっていると感じますか
熱意	先生は熱心にホームルーム活動に取り組んでいますか
授業改善	前回の授業評価の結果を踏まえて、ホームルーム活動は改善されていますか
授業準備	先生はホームルーム活動の準備をしっかりとしていますか
授業計画	ホームルーム活動で取り上げる題材（テーマ）は適切ですか
授業計画	ホームルーム活動の内容は適当な量ですか
興味関心	興味や関心のもてる内容のホームルーム活動ですか
興味関心	知りたいことが分かるホームルーム活動ですか
興味関心	やる気が起きるホームルーム活動ですか
時間の確保	先生はホームルーム活動の時間をきちんと守っていますか
時間の確保	生徒が考える時間が確保されていますか
生徒の参加	一方的な話ではなく、生徒が参加できるホームルーム活動ですか
生徒の参加	自分の考えや意見を十分に言えるホームルーム活動ですか
生徒の参加	生徒の発言の機会があるホームルーム活動ですか
生徒の参加	ホームルーム活動中、質問をしやすい雰囲気ですか

観 点	質 問 項 目
満足度	あなたはホームルーム活動が楽しいですか
満足度	あなたはホームルーム活動に満足していますか
有用性	進学、就職などの将来に役立つ内容ですか
有用性	視野が広がったり、人生や進路に影響を与えるような内容ですか
有用性	将来、このホームルーム活動はあなた自身に役立つと思いますか
質問への対応	生徒の質問に誠意をもって答えていますか
質問への対応	生徒の質問に分かりやすく答えていますか
質問への対応	生徒の発言や反応に的確に対応していますか
質問への対応	生徒一人一人の質問に答えていますか
生徒支援	先生は全員が協力して活動するように支援していますか
生徒支援	もっと活動したいときの援助がありますか
生徒支援	理解できなかつたときの援助がありますか
生徒支援	適切な助言をしていますか
生徒支援	生徒が自主的に取り組めるような援助がありますか
教材	プリントなどの補助教材や資料は使いやすいですか
教材	配布された資料は役に立っていますか
教材	生徒が興味を持てるような教材を用意していますか
意見・要望	「よいホームルーム」を作るためにアンケート以外に実施したらよいと思うことを書いてください
意見・要望	ホームルーム活動で特に取り上げて欲しい題材があったら書いてください
意見・要望	今後どのようなことをしていけばホームルーム活動への満足度が上がると思われますか、自由に書いてください

(3) 授業評価票作成上の留意点

上記の質問項目を基に、各学校で授業評価票を作成する際は、生徒の実態に応じて質問項目の数や表現を変えることが必要である。

また、授業評価の活用方法に応じて、自己評価や自由記述を追加したり、記名式、無記名式を選択して行うことが有効である。

(4) 授業評価結果の活用方法

授業評価結果を基に、ホームルーム活動の内容や教員の指導方法を改善していくことが生徒による授業評価の目的である。さらに、ホームルーム活動における授業評価は、実施方法に応じて、個々の生徒理解などにも活用できる。

また、学年に関する内容であれば、学年会などで話題にし、共通の理解を図ることが大切である。

3 実践事例Ⅰ 「定時制課程におけるホームルーム活動の改善」

(1) 学校の特色と生徒の実態

A校は定時制課程併置の普通科高校である。生徒の実態は、昼間の時間帯に定職につく生徒は少ない。また、アルバイトをしたり家で過ごす者が多く、規則正しい生活習慣が身に付いていないため、きちんと登校できない生徒も多い。卒業後の進路は、大学、短大、専門学校へ進学する生徒もいるが、多くの生徒は、アルバイトに引き続き従事するか、無業者になってしまう場合もある。

(2) 生徒による授業評価のねらい

ホームルーム活動は、教科・科目の学習と比べると、生徒同士の関係をより深める機会が多い。また、ホームルーム活動を生徒の実態により即したものにすることで、学校全体が更に活気のあるものとなり、結果として進級率の上昇、学習意欲の向上、各個人の悩みの解消などが期待できる。以下、具体的なねらいを記す。

- ① 生徒自身のホームルーム活動時における態度や意識の向上を図る。
- ② 指導の目標や内容などが正確に伝わっているかを把握する。
- ③ 生徒の要求や実態に即した目標や内容になっているかを把握する。
- ④ 上記②、③について、ホームルーム、学年、学校全体で共有し、改善を図る。

(3) 評価者

A校（定時制・普通科）2年 47名

(4) 生徒による授業評価の取り組みの経過

授業評価は学期に1回とし、年3回行った。これまでは、各学期に大きな学校行事、例えば文化祭、修学旅行、遠足などがあつたときはその直後に感想を交えたアンケートをとってきた。集計した評価を基に、各学年で学年会を開き、内容を分析して問題点、改善点を洗い出し、いかにして解決できるかを話し合った。

また、良い点などほぼ目標に達した項目については認識を共有化した。それと同時に、評価者としての生徒に対して、評価結果と今後の改善点を伝えた。

さらに、校内研修会を開き、学年を越えて全校としての改善点や良い点などの確認をし、日々のホームルーム経営や、進級、卒業、進路にかかわる指導に生かし、ホームルーム活動を通じて生徒一人一人が目標を持って学習できる環境づくりを目指した。

表1 主なホームルーム活動の内容（抜粋）

題材	内容	題材	内容
進路希望調査	適性検査、希望調査	遠足について	事前調査
修学旅行を考える	旅行先の決定	文化祭準備	出展の内容討議
大検ガイド	手続きガイダンス	講演会	進路に関すること
テストの結果・出欠状況	欠時数の確認	1年間の反省	1年の反省

(5) 結果と考察

事前に生徒にはアンケートの目的と回答方法を説明して、円滑に実施できるよう準備をした。

また、質問項目を決定する際に留意した点については、授業評価票を作成する前に学年会を開き、予想される回答をある程度考えて、評価の観点を決定した。

教員は、「ホームルーム活動の目的が理解されるよう指導しているか」、「十分な生徒への支援ができているか」、「配布物は適切か」、「十分に生徒を参加させることができたか」、「ホームルーム活動について興味関心が高まったか」などの観点をあげて、それらの観点にあった質問を選択した。

授業評価については、「話し方、目的や内容の明確化」、「教員の姿勢」、「質問への対応」、「生徒支援」、「教材」、「興味関心」については、大多数が「はい」又は「どちらかといえばはい」の回答であった。

生徒の自己評価については、多くの生徒がホームルーム活動を行う態度ができていたという結果であるが、生徒同士が協力して活動を行うという部分においては3分の1の生徒が協力できなかったと回答している。

しかし、生徒への声かけ、授業計画、時間の確保、満足度においては比率的に3分の1近くの生徒が「いいえ」又は「どちらかといえばいいえ」と答えている。評価できる点については、「生徒に公平に接している」、「よいアドバイスをしてくれる」、「生徒に分かりやすく答えている」などで多くの支持を生徒から得られているということである。日々の生徒への対応が適切であったことを表しており、今後の指導に対して自信が持てる結果となった。

これらの結果を踏まえて改善しなくてはならない課題を挙げると

- ① 臨機応変に生徒の内面を読む教員の態度や姿勢
 - ② 生徒の負担を減らす適切な量の活動
 - ③ いかに生徒にとってホームルーム活動が大切で、充実した時間を過ごせるものなのかを感じさせるホームルーム活動全体の再構築
 - ④ 生徒同士が協力して活動できる雰囲気づくり
- である。

実践の結果として言えることは、ある程度予想していた通りの結果になったという点や、改善するためには、個人で解決できることと、学年や学校全体で取り組まなければならないことがあるということである。これらの課題を組織的に解決するためには、学年会、そして学校全体での校内研修会で対応策を考え、改善することが必要である。

そのような対応により、より生き生きとしたホームルーム活動の構築が可能となる。また、最終的には、学校全体において進級率の上昇や主体的な進路の選択決定につながると考えられる。

4 実践事例Ⅱ 「チャレンジスクールにおけるホームルーム活動の改善」

(1) 学校の特色と生徒の実態

B校は、昼夜開講三部制・総合学科・単位制の新しいタイプの定時制高校である。B校は、小・中学校時代に不登校を経験した生徒や高等学校を中途退学した生徒を含め、これまでの教育の中で自己の能力や適性を十分に生かしきれなかった生徒、つまり多様な生徒が、学校生活を通じて自分の目標を見付け、それに向かってチャレンジする学校である。生徒の6～7割が小・中学校時代に不登校を経験した生徒であり、3割弱が過年度卒業生で、その多くは高校を中途退学した生徒である。

(2) 生徒による授業評価のねらい

生徒による授業評価は、指導法に対する評価だけではなく、生徒とのかかわりも含めた授業全体の評価である。したがって、ホームルーム活動における授業評価の意義は大きい。

B校では、ホームルームを「ホーム」と呼び、15名程度で編成している。週に一度設けられているホームルーム活動の時間は、担任と生徒が交流を図る貴重な時間である。単位制・三部制というチャレンジスクールの特色の中で、ホームルーム活動の機能や特質を生かしていくために、以下の4点をねらいとした。

- ① 教員の指導が適切かどうかを把握する。
- ② ホームルーム活動の授業計画が、生徒の実態に即しているかを把握する。
- ③ 生徒による授業評価の結果を、ホームルームの生徒の個別支援に生かしていく。
- ④ 上記①～③を通して、担任の指導方法及び年次における年間授業計画を含め、ホームルーム活動の改善を図っていく（図1）。

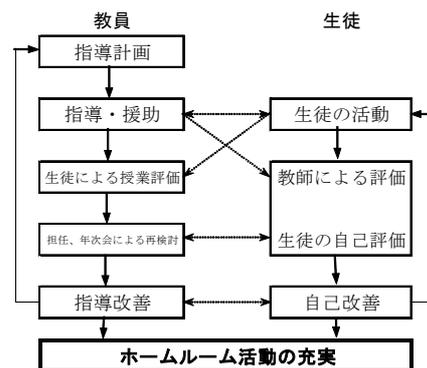


図1 ホームルーム活動における生徒による授業評価の流れ

(3) 評価者

B校（定時制・総合学科）1年次 I部 43名

(4) 生徒による授業評価の取り組みの経過

授業評価を行うに当たって、担任と生徒との良好な人間関係を構築し、評価結果に基づいた個別支援や継続的指導を行うために、記名式にした。

授業評価票作成に当たっては、「担任の指導改善に関すること」、「年次の企画・運営の改善に関すること」の二つの観点から、18項目を選択した。さらに、年度当初に行われた新入生適応指導宿泊研修に関する項目を2項目、その他意見・要望を1項目追加した。また、授業に積極的に参加して、より良い授業を作ろうとする意識を生徒に持たせ、生徒自らが学ぼうとする主体的な姿勢をはぐくむために、自己評価4項目を加え、合計25項目で実施した。実施時期は、前・後期各1回とし、本実践では前期の授業評価として7月に実施した。

表1 ホームルーム活動の内容(抜粋)

	題材	内容
4月	アットホームキャンプに向けて	アットホームキャンプに向けての作業を行う。
	アットホームキャンプのまとめ	アットホームキャンプのまとめを行う。
	3系列(アートデザイン、福祉・教養、情報ビジネス)体験	2週にわたって3系列体験を行い、進路について考える。
	適性検査	KJQテストを行い、自己を知る。
	7月体験実習に向けて	7月体験実習に向けて、各コースの希望調査を行う。
	卒業生進路座談会	卒業生から話を聞き、進路について考える。
	上級学校見学に向けて	上級学校見学について、各コースの希望調査を行う。
	文化祭準備・まとめ	文化祭に向けて準備を行う。
	進路学習	進路について考える。
	次年度時間割登録	数週にわたって、次年度の時間割作成・登録を行う。
翌年3月	講演会	職業について考える。
	ライブプランの作成	ライブプランについて考える。
	1年間のまとめ	1年間のまとめを行う。
	その他全年次合同ホームルーム活動	全年次合同で、連絡等を行う。

(5) 結果と考察

授業評価の結果、ホームルーム担任の話し方や姿勢に関しては、良好な結果が得られた。

一方、ホームルーム活動は、ホームルーム担任だけでなく、年次全体として題材を検討しながら指導計画(表1)を作成し実施している。したがって、生徒による授業評価を生かして指導の改善を図っていくためには、ホームルーム担任個人に関することだけでなく、年次や学校全体として協力しながら改善をしていくような評価項目が必須である。

その結果、今回実施した授業評価項目No.2(説明の仕方)とNo.13(授業計画)において、「はい」と回答した生徒は90%以上と多いことから、ホームルーム活動で扱った題材については適切だったといえる。しかし、No.11(教材)とNo.16(時間の確保)から、約3割の生徒が「配布された資料は役に立っていない。」「生徒が考える時間が確保されていない。」と回答しており、配布資料や授業進行に課題があると分かり、年次として指導計画の再検討を行い解決を図った。ホームルームにおける活動は、自主的、実践的な活動であるため、教員の生徒支援が適切であったかどうかは必ず確認する必要がある。生徒支援に関する項目No.9とNo.10において、80%以上の生徒が「はい」と回答し、良好な結果が得られた。さらなる改善を図っていきたい。

また、記名式にしたことで、「個に応じた指導」が可能となった。特に、様々な事由によりホームルーム活動に参加しにくい生徒に関しては、回答結果を踏まえながら、その後の指導に生かしていくことができた。

多様な生徒が集まるチャレンジスクールでは、生徒への個別支援がとても重要であるため、生徒による授業評価の結果は、生徒理解の側面からも非常に有用なものとなった。

今後の課題として、単位制という特色上、週に一度のホームルーム活動への生徒の参加率を向上させなければならない。そのためには、今回の評価結果を踏まえて、生徒の実態に即した授業計画を再構築するとともに、ホームルーム活動の意義を生徒に浸透させていく必要がある。ホームルーム活動の時間は、事務連絡、学校行事の準備・まとめ、進路指導などを並行して行っていることが多く、生徒にとっても、どんな取組に対する評価を行えばよいのか不明確な点がある。そのため、授業評価の効果的な運用に関しては、実施時期や評価項目の選択をさらに検討していく必要がある。

(a) A校における生徒による授業評価集計結果(アはい、イどちらかといえばはい、ウどちらかといえばいい、エいい)(単位:人数)

	観点	評価項目(質問)	ア	イ	ウ	エ	無回答
1	教員の指導に関する項目	説明の仕方	27	13	2	5	0
2		目的や内容の明確化	30	7	5	5	0
3		目的や内容の明確化	30	6	7	4	0
4		姿勢	29	7	4	7	0
5		姿勢	28	2	7	10	0
6		質問への対応	35	4	2	6	0
7		生徒支援	40	1	5	1	0
8		生徒支援	31	9	2	5	0
9		教材	35	4	2	6	0
10		授業計画	ホームルーム活動の内容は適当な量ですか	19	9	7	12
11	企画・運営に関する項目	授業の工夫	22	14	6	5	0
12		興味関心	31	1	8	7	0
13		興味関心	28	5	8	6	0
14		時間の確保	28	7	2	10	0
15		生徒の参加	22	12	3	0	0
16		満足度	21	9	12	5	0
17		満足度	24	8	8	7	0
18		姿勢	36	1	5	5	0
19		姿勢	40	5	2	0	0
20		協調性	25	5	10	7	0

(b) B校における生徒による授業評価集計結果(アはい、イどちらかといえばはい、ウどちらかといえばいい、エいい)(単位:人数)

	観点	評価項目(質問)	ア	イ	ウ	エ	無回答
1	教員の指導に関する項目	生徒把握	18	21	1	3	0
2		説明の仕方	13	28	0	2	0
3		授業の工夫	10	25	5	3	0
4		授業の工夫	12	20	8	2	1
5		説明の仕方	19	19	5	0	0
6		姿勢	22	14	5	2	0
7		熱意	14	23	4	1	1
8		質問への対応	20	15	5	2	1
9		生徒支援	13	19	9	1	1
10		生徒支援	15	22	5	1	0
11		教材	14	17	5	7	0
12	企画・運営に関する項目	アットホームキャンプ	21	17	2	1	2
13		授業計画	19	21	1	1	1
14		授業計画	20	17	3	2	1
15		時間の確保	22	16	2	3	0
16		時間の確保	16	15	9	3	0
17		生徒の参加	9	24	7	2	1
18		有用性	14	19	4	6	0
19		満足度	16	12	9	5	1
20		アットホームキャンプ	13	15	7	5	3
21		自己評価	意欲	21	16	5	1
22	意欲		18	15	9	1	0
23	意欲		22	8	7	6	0
24	アットホームキャンプ		19	17	3	3	1
25	その他	「ホームルームの時間は少なかったけど、楽しくやれたと思う。」「とてもおもしろくていいと思います。」「もう少しプリントを書く時間が欲しいと思います。」「いろいろな方々のお話が聞けて、将来役立つと思う。」「多分、他のクラスよりホームルームの回数や時間が多と思うので、クラスにまとまりができていいと思います。」「いい授業が多いけど、最後にまとめる紙があると思うと、自主的にやるっていう気持ちが薄くなる。もっと簡単なまとめ方にしてほしい。」「話が分かりやすい。」「がんばってください。」「きちんと話も聞けた。クラスでも、アットホームキャンプの時とか、きちんと話し合いができた。」					

Ⅲ 研究の成果と課題

本研究は、ホームルーム活動における授業評価の観点例について研究開発を行い、ホームルーム活動の改善を図ることをねらいとした。まず、本部会では、すべての都立高校において活用できる質問項目の作成に取り組み、「説明の仕方」や「生徒の参加」など19観点、計53項目を提示することができた。本部会で作成した質問項目を学校の実態に応じてそのまま、又は、追加・修正した上で用い、定時制課程併置の普通科であるA校とチャレンジスクールのB校で授業評価を実施した。

各校での授業評価は、A校では無記名式、アンケート形式のみ、B校では記名式、アンケート形式と自由記述の併用で行った。前者の方法では、当該生徒に対する個別指導ができない反面、ホームルーム活動に対する率直な意見を聞くには有効であった。後者の方法では、生徒の出した回答が必ずしも率直なものとは言えないという指摘もあるが、評価結果に基づいた個別支援や継続的指導に生かすことができた。目的や評価結果の活用方法に応じて、実施方法を選択することで、より有効な授業評価を実施できる。

また、両校の実践事例から、生徒による授業評価を生かし、ホームルーム活動の改善を行うためには、学年や学校全体での協力体制がとりわけ重要であることが分かった。授業評価の結果において、担任の指導に関することは、担任自身ですぐ改善していくことができた。しかし、ホームルーム活動の年間授業計画など、学年や学校に関する内容に関しては、学年会や各校務分掌、校内研修会などで再検討し、ときには生徒の意見も取り入れながら改善を進めていかなければならない。また、授業評価の結果の活用に当たっては、少数意見にも十分に注意を払い、授業改善や個別支援につなげていくことが大切である。

今後の課題としては、

- ① 現在様々なタイプの都立高校があることを考慮し、各学校で活用できる質問項目の追加・修正を行うこと
 - ② 授業評価を効果的に行うために、実施時期や実施時間、質問項目の数などに関して、更なる改善を図ること
 - ③ 生徒による授業評価の結果を生かすために、ホームルーム活動を改善してくための学校組織の構築を図ること
- などが挙げられる。